

アブハズ語アクセントと schwa について (1)

柳沢 民雄

0. はじめに

アブハズ語アクセントについては、バルト・スラヴ語の比較歴史アクセント研究を積極的に行っている V. A. Dybo によって「Dybo の法則」が提起され、この法則は、A. Spruit (1985) によって修正されながらも採用されている。この法則の有効性に関してはすでに柳沢 (2000) の中で言及したように、アブハズ語話者のインフォーマントから蒐集した資料から判断する限り、動詞複合体のある形のアクセント位置をこの Dybo の法則によって予測することはできない (4 章参照)。それにも拘らずこの法則の例外をどのように処理するか、またこの法則がどのような意味をもつものを吟味することは、アブハズ語アクセント論ばかりでなく、北西カフカース祖語のアクセントの性質を推定することにも関連する重要なことと思われる。

本論では、1 章で Dybo の法則と Spruit によって修正されたアブハズ語アクセント法則を説明し、2 章ではアクセントと密接に関係する schwa の問題を扱う。3 章では schwa の音韻論的解釈に関わる諸問題に触れる。4 章ではアブハズ語インフォーマントより蒐集した動詞形を用いて Dybo の法則を検討する。5 章では Dybo の法則がもつアブハズ語アクセントの音韻論的解釈を検討し、北西カフカース祖語が音調言語であったことを仮定する。

1. アブハズ語の「Dybo の法則」

1. 1. スラヴ語の比較歴史アクセント論において、Dybo (1981: 260-261) は以下のように「アクセント結合価 valency の形態音韻的等級」の原理を述べている：

「スラヴ祖語において全ての形態素は、その強勢 ictus に関して二つの形態音韻論的韻律素クラスに分けられる：I. 「優性形態素 доминирующие морфемы」クラス（強勢が所属する形態素）と II. 「劣性形態素 рецессивные морфемы」クラス（強勢が所属しない形態素）。これらの形態素クラスの韻律素的な形態音韻論的特徴を、我々はアクセント法的な「結合価 валентности」と呼ぶことを提案した：I クラスは高い結合価；II クラスは低い結合価。我々はこれらの形態素に関して特別な記号を導入する：高い結合価

の形態素は (+) 記号を持ち、低い結合価の形態素は (-) 記号を持つ。このような印のある形態素からなる配列の際に強勢はどうかを考察してみよう(アクセントは母音あるいは記号の右肩に記号'で記す)。

(1) sta'r-ьc-ь̄ (+'++) (gen. pl.); brju'x-at-ě-ti (+'+++) (inf.); vy'-děl-a-ti (+'+++) : (+) 形態素からのみなる配列では強勢は最初の形態素にある。

(2) lě'n-ъ (-'--) (nom. sg. m.); lě'n-ost-ъ (-'--) (nom. sg.); lě'n-ost-ь'n-o (-'---) (nom. sg. n.); kɾь'v-av-φ (-'--) (acc. sg. f.); o'-kɾь'v-av-i-l-ъ (-'----) (l-part., nom. sg. m.): (-) 形態素からのみなる配列では強勢は最初の形態素にある。

(3) lě'n-ost-ъ-jφ (-'--+) (instr. sg.); mě'x-ov-ь'j-e (-'--+) (nom. sg. n.); mold-ь'c-e-m; (-'+--) (instr. sg. m.); gla'd-ьk-o-m; (+'---) (instr. sg. m.): たった一つの (+) 形態素だけが入る配列では、強勢は (-) 形態素の数や配置とは無関係に、この (+) 形態素の上にある。

(4) sta'r-ost-ъ-jφ (+'--+) (instr. sg.); bog-at-o-jφ (-+'--+) (instr. sg. f.); mě'd-ɕn-ic-e-jφ (+'--+) (instr. sg.); mě'd-ɕn-ic-a (+'--+) (nom. sg.): (-) 形態素によって区切られる若干の (+) 形態素からなる配列において、強勢は最初の (+) 形態素の上にある。

(5) ko'z-ьj-e-jφ (+'+++) (instr. sg. f.); sto'l-ič-ь'n-o-jφ (+'+++) (instr. sg. f.); čь'rn-ič-ь'n-ik-ъ̄ (+'++++) (gen. pl.); čь'rn-ič-ь'n-ik-o-ma (+'++++) (instr. du. m.); že'n-ьstv-ь'n-ost-ъ-jφ (+'++++) (instr. sg.): (-) 形態素によって他の (+) 形態素から区切られている、いくつかの同種の (+) 形態素の配列(「プラットフォーム」)からなる配列において、強勢は (+) 形態素の第1番目の配列の最初の形態素の上にある。

(1)と(2)は、同じ「結合価」の形態素の配列は、最初の形態素の上に強勢を受取ることを示している。

(3)と(4)は、異なる「結合価」の形態素の配列は、第1番目の優性形態素の上に強勢を受取ることを示している。

(5)を考慮に入れると、「バルト・スラヴ語」の形態素配列の全てのタイプにおける強勢の設定を規制する一般的な「曲線規則 контурное правило」は、以下のように定式化できる:強勢は、最も高い結合価の形態素の第一配列の最初に置かれる(この場合、配列と見なされるのは単一の形態素もまたそうである)。恐らく、もっぱら (-) の結合価だけの形態素の配列において、この規則に応じて配列の初めに落ちる強勢は、残りの場合に置かれる強勢とは音的に異なっていたであろう。(…)

このようなアクセント体系の比較歴史的的分析は、次のことを示している:このタイプのアクセント体系は、(完全なあるいは部分的な)音調の区別の喪失によって引き起こされた、音調と結びついたアクセント曲線の音韻化の結果としてふつう発生する。」

1. 2. Dybo はこのような「アクセント結合価の形態音韻的等級」の原理を北西カフカース諸語の一つであるアブハズ語 Abkhaz のアクセントに用い、そのアクセント法則を導き出している。Dybo に従って、アブハズ語の名詞の派生形のアクセントを検討してみよう。なおアブハズ語のアクセントは自由な強弱アクセント dynamic stress であり、どの音節にも置かれ、音韻論的な対立を成す：á-la “the-eye”: a-lá “the-dog”。以下では、アクセント（強勢 stress）は母音の上に acute 記号で記し、強勢と言わずにアクセントと呼ぶことにする。

Dybo は非派生名詞の 3 つの語形（定冠詞 a- が附加される場合、不定の接尾辞 -k' が附加される場合、定冠詞と複数の接尾辞 -k^wa が附加される場合）のアクセントの振舞いから、アクセント・タイプを三つのタイプに分けている：

Type I: a-lá (the-dog) ‘the dog’, lá-k' (dog-one) ‘one dog’, a-la-k^wá (the-dog-PL) ‘the dogs’;

Type II: á-bla (the-eye) ‘the eye’, bla-k'á (eye-one) ‘one eye’, á-bla-k^wa (the-eye-PL) ‘the eyes’;

Type III: a-psó3 (the-fish) ‘the fish’, psó3-k' (fish-one) ‘one fish’, a-psó3-k^wa (the-fish-PL) ‘the fishes’.

この内、最後の Type III は、アクセントが移動しないタイプであり、このタイプは、Dybo によれば、その語の第一要素は Type I に属し、その第二要素は Type II に属す合成語にみられるという。従ってアブハズ語のアクセントは、Type I と Type II の 2 つのアクセント・タイプに還元できる。

Dybo は以下の手順を踏んで、これらの各形態素を二つの形態音韻論的韻律素クラス（即ち、「優性形態素」と「劣性形態素」）に分けている (Dybo: 1998: 130-132)。

(a) 両タイプの孤立された語形（語根形態素）におけるアクセントは、語形の末尾にある：これは 2 音節語根の形態素の例において明らかである：Type I: wasá ‘sheep’, Type II: sasá ‘guest’.

(b) 2, 3, 4 の形（この数字は、Dybo の表にある数字を表している。ここでは表を省略しているので、Dybo の表にある例の若干を引用する）

Type I: lá-k', wasá-k'; šá-la (blood-INSTR), labá-la (stick-INSTR), 3á-la (water-INSTR); vasá-da (bzyb. dial.) (sheep-without);

Type II: bla-k'á, sasá-k'á (> blá-k', sasá-k'), mǎč-lá (force-INSTR), c'ǎx-lá (night-INSTR); mǎr-dá (bzyb. dial.) (sun-without)

において、語形の末尾アクセントは Type II で保たれるが、Type I では語幹に引寄せられている。Type I に加わっている語幹のこのアクセントを引きつけるという特徴は、如何なる音韻論的説明ももたず、形態音韻論のレベルに属する。

(c) そのような形におけるアクセントを引きつける能力を有する形態素を (+) 記号で標示し、そのような能力のない形態素を (-) 記号で標示する。

(d) 8 と 9 の形 (b) と同様にこの数字は, Dybo の表にある冠詞 a- と所有接頭辞 s(ə)- がそれぞれ附加した形である. その形を引用する):

Type I: a-lá (the-eye), a-wasá (the-sheep); s-lá (my-dog), s-wasá (my-sheep);

Type II: á-bla (the-eye), á-sas (the-guest); sǎ-bla (my-eye), sǎ-sas (my-guest)

において, 冠詞と所有接頭辞の附加は, Type II におけるアクセントの冠詞への, また同様に接頭辞への移動を引き起す.(c) の操作を繰返すと, これらのフォルマントに (+) 記号を付けることができる.

(e) アクセントをこのフォルマントに与えるのは (-) 記号によって標示された形態素のみであり, それに対して (+) 記号によって標示される形態素はアクセントを保持する, ということが明らかになる.

(f) 上の (e) と関連して, 標識の基礎を拡張することができる: 2, 3, 4 の形において先行する (+) 形態素にアクセントを与える形態素 -k'ə, -la, -da は, (-) 記号によって標示されたものと見なすことができる. 先行の (+) 形態素と 5, 6 (また 12, 13, 14, 15) の形 (上記と同様にこの数字は Dybo の表にあるものである. それらの形を若干挙げる):

Type I: nc^wa-gǎ (god-also); pa-c^wá (son-PL); a-la-k^wá (the-dog-PL), a-wasa-k^wá (the-sheep-PL), a-pa-c^wá (the-son-PL); s-la-k^wá (my-dog-PL), s-wasa-k^wá (my-sheep-PL), s-pa-c^wá (my-son-PL); a-la-gǎ (the-dog-also), a-wasa-gǎ (the-sheep-also); s-la-gǎ (my-dog-also), s-wasa-gǎ (my-sheep-also).

Type II: mj^wa-gǎ (road-also); sas-c^wá (guest-PL); á-bla-k^wa (the-eye-PL), á-sas-c^wa (the-guest-PL); sǎ-bla-k^wa (my-eye-PL), sǎ-sas-c^wa (my-guest-PL); á-bla-g'ə (the-eye-also), á-sas-g'ə (the-guest-also); sǎ-bla-g'ə (my-eye-also), sǎ-sas-g'ə (my-guest-also)

において (Type I), アクセントを保持する形態素 -c^wa, -k^wa, -g'ə は, (+) 記号によって標示されるものと見なすことができる.

(g) 今この標識を残りの全ての語形に拡大すれば, 表に提示された図式を得ることができる (Dybo の表の中では記号 (+), (-) が各語形の形態素の下に記されているが, ここでは右側にその記号を記す. その若干の例を挙げる):

Type I: lá (+), wasá (+), lá-k' (+' -), labá-la (+' -), wasá-da (+' -), nc^wa-gǎ (+ +'), pa-gǎ (+ +'), pa-c^wá (+ +'), a-lá (+ +'), a-wasá (+ +'), s-lá (+ +'), s-wasá (+ +'), jǎ-lá-k' (his-dog-one) (+ +'), a-la-k^wá (+ + +'), a-wasa-k^wá (+ + +'), s-pa-c^wá (+ + +'), a-la-gǎ (+ + +'), a-wasa-gǎ (+ + +'), s-la-gǎ (+ + +'), s-wasa-gǎ (+ + +'), a-la-k^wa-gǎ (+ + + +'), a-wasa-k^wa-gǎ (+ + + +'), a-pa-c^wa-gǎ (+ + + +'), s-la-k^wa-gǎ (+ + + +'), s-wasa-k^wa-gǎ (+ + + +'), s-pa-c^wa-gǎ (+ + + +').

Type II: blá (-), sasǎ (-), bla-k'ǎ (- -'), sasǎ-k'ǎ (- -'), mǎč-lá (- -'), c'əx-lá (- -'), mǎr-dá (- -'),

mj^wa-g'ǝ́ (- +'), sas-c^wá (- +'), á-bla (+' -), á-sas (+' -), sǝ́-bla (+' -), sǝ́-sas (+' -), jǝ́-mah^wǝ́-k' (his-'son-in-law'-one) (+' - -), á-bla-k^wa (+' - +), á-sas-c^wa (+' - +), sǝ́-bla-k^wa (+' - +), sǝ́-sas-c^wa (+' - +), á-bla-g'ǝ́ (+' - +), á-sas-g'ǝ́ (+' - +), sǝ́-bla-g'ǝ́ (+' - +), sǝ́-sas-g'ǝ́ (+' - +), á-bla-k^wa-g'ǝ́ (+' - + +), á-sas-c^wa-g'ǝ́ (+' - + +), sǝ́-bla-k^wa-g'ǝ́ (+' - + +), sǝ́-sas-c^wa-g'ǝ́ (+' - + +)

これらの記号に立脚するならば、形態素の配置のアクセント付与規則を定式化することは容易である。アクセントが付与される「結合価」の形態音韻的等級（最も高い結合価は記号 (+) によって標示される形態素であり、最も低い結合価は記号 (-) によって標示される形態素である）の概念を導入すると、「アクセントは常に最も高い結合価の形態素の第一配列の末尾に置かれる」(Dybo: 1998: 132; Dybo: 2000: 663)。

我々はこのアブハズ語のアクセント配列の法則を、「アブハズ語の Dybo の法則 *Dybo's law of Abkhaz*」と呼ぶことにする。これは Dybo が仮定したバルト・スラヴ語のアクセント付与の法則とは異なり、アブハズ語ではアクセント（強勢）は最も高い形態素の第一配列の末尾に置かれる。これを結合価の記号で表せば次のようになるう：

- + + ' - - + + ...

また結合価の記号が (-) のみの場合について、Dybo はアドゥゲ語 *Adyghe* を除いた北西カフカース諸語のアクセントについて言及しながら、「アブハズ・ウビフ語 *Ubykh* においてアクセントは、高音調音節 *высокотоновые слоги* の第一配列の最後の音節の上にあるか、あるいは音声的語において高音調音節が欠如している場合には単に最後の音節の上に置かれた」(Dybo: 2000: 7), と述べている。

このことは Dybo が結合価の記号が (-) のみの場合について、アクセントは語の末尾形態素の上にあると考えていることを示している :(- - -' #)

1. 3. Dybo の法則は A. Spruit (1985) によって変更を加えられた。Spruit による変更の第一は、アクセントが付与される「結合価」の単位を Dybo が仮定した形態素から、「要素 *elements*」に変更したことである。Spruit はこの「要素 *elements*」について次のように定義している (Spruit: 1985: 31):

To describe the place of the stress in Abkhaz words it is convenient to consider each word as consisting of a string of elements *C(ə)* or *Ca* (where *C* is any consonant); in addition, there are elements *a* and *aa* (*a* being counted a separate element in morpheme-initial position).

Elements *C(ə)*, *Ca* (and also the instances of *a*, *aa* just mentioned) are combinedly referred to as "*C(a)*". In the absence of *a*, the occurrence of *ə* is to a very large extent predictable. A stressed element *C(á)* is realized as *Cá* or, in the absence of *a*, as *Cǝ́*.

Spruit はこのような「要素」単位のそれぞれを、アクセントの観点から 2 つのクラス、

即ち, Dybo が仮定したものと同様な「優性 dominant (D により表記)」クラスと「劣性 recessive (R により表記)」クラスに分ける。これによりアブハズ語の語は, アクセントの観点から “a string of D's and/or R's” から成るものと仮定され, 以下のような一般化されたアブハズ語のアクセント規則が述べられる (Spruit, *ibid.*: 32):

The general rule for the stress is that it falls on the first *D* in the word not followed by another *D* (hence on the first *D* followed by *R* or by #). Examples (*D'* is the stressed element): *D'*, *D' R*, *RD'*, *DD'*, *RD' R*, *RRD'*, *RDD'*, *DDD'*, *RD' RR*, *RD' RD*, *RDD' R*, *DDDD'*, *D' RDD*, etc. .

また「劣性要素」Rのみから成る語については, Dybo の仮定とは異なり Spruit は次のように述べ, その語のアクセントが置かれる場所を予期できないとしている (Spruit, *ibid.*: 32):

The rule does not predict the position of the stress in words with elements *R* only; for such words, the position of the stress has to be stated for each particular morphological type.

このような要素Dからのみ成る形は, Spruit によって下線が引かれている: R'R / R'R.

Spruit が仮定するアクセント規則によって, 各要素がどのアクセントクラスに属するかを決める過程を, 具体的に Spruit の使った例を挙げて述べてみよう。

「アブハズ語の名詞の引用形 (辞書の形) には, 定冠詞 a- が現れる。名詞 C(a) については2つの可能性がある: a-C(á) と á-C(a)。これらは D D' と D' R あるいは R D' と R' R のどちらかである (この場合に, R R は第一音節にアクセントを持つことになろう)。どちらの場合も名詞は D- クラスと R- クラスに分れよう。もし今, z- “whose” のような他の接頭辞を同じ名詞に附加したならば, a-C(á) に対しては z-C(á), á-C(a) に対しては z-C(á) / z-á-C(a) になる。ここから a- は D であり, z- は R であることが分る:

a-C(á) ₁	D D'	á-C(a) ₂	D' R
z-C(á) ₁	R D'	z-C(á) ₂ / z-á-C(a) ₂	<u>R'R</u> / <u>R'R</u>

例えば, la D “dog”, la R “eye”, a-lá “the dog”, á-la “the eye”, z-lá “whose dog”, z-lá / z-á-la “whose eye”; ʒə D “water”, ʒə R “flea”, a-ʒá “the water”, á-ʒ “the flea”, z-ʒá “whose water”, z-ʒá / z-á-ʒ “whose flea”.] (Spruit, *ibid.*: 32)

Spruit は, 2音節以上の語についても同様な方法でアクセント規則が適応できるとしている。例えば, a-ʒ-y'á D D D' “swift water”, a-čš-z D D' R “sorrel horse”, á-ž-y'w a D' R D “dry oak”, á-s'wə-z'w D' R R, s'w-z'w-á-k' / s'wə-z'w-k' R R' R / R R R' “old door” (Spruit, *ibid.*: 35).

また Spruit によれば, 多音節形態素におけるある要素のアクセントクラスを決めることが出来ない場合があるという。例えば, 3音節形態素 *DRD と *DRR があるとすれば, *a-D' RD, *D' RD-k' と *a-D' RR, *D' RR-k' になってしまうであろう。この場合に

は末尾音節のアクセントクラスは不確定になってしまう。Spruit はこの末尾音節の不確定のクラスを “I” (= Indeterminate) の記号で表記する :DR I (Spruit, *ibid.*: 33)。また Spruit によれば、この要素 I は、一般に要素 D と同様にアクセントを引きつけ、アクセントのある I を有する形 (例えば, R I' RR, RI' RD) は規則的であると考えられるという。何れにせよ、重要なことは、この要素 I の音節において D vs. R の対立が欠如している、即ち、この音節においてアクセントクラスの特徴は中和しているということである。

1. 4. 以上のように Spruit のアクセント規則は、本質的には Dybo のアクセント法則と同様のものであるが、前者はアクセントの観点から C(a) なる「要素 element」を単位と仮定するのに対して、後者は「結合価 valency」という形態素を単位とする点に大きな違いがある。アクセント付与の法則が C(a) の単位で働くのか、あるいは「結合価」という形態素単位で働くのかは、議論のあるところであろう。しかしここでは二つの点で、Spruit の仮定する C(a) 単位を用いる方法が以下の議論を有利に進めることができると思われる。まず第一点は、アブハズ語の母音音素の問題である。多くのアブハズ語研究者はアブハズ語の母音音素として、/a/ と /ə/ の 2 つを認めている (Lomtatidze, Hewitt, Chirikba)。しかしこの内の schwa ə を音素として認めるべきかどうか、ということには議論のあるところである。例えば、古くはアブハズ語と方言関係にあるアバザ語 Abaza が単母音体系であるという W. S. Allen (Allen: 1965: 111-124) の説があった。また A. H. Kuipers の北西カフカース語の 1 つであるカバルダ語 Kabardian の子音と母音との対立が存在しないという仮説 (Kuipers: 1960) が提唱された。これは後に所謂「無母音説 no-vowel hypothesis」とされ、一部の研究者からの反論があった²⁾。アブハズ語の schwa の出現は様々な環境が考えられるが、多くの場合にその出現が予測可能である。その内のアクセントに関わる schwa の出現は最も明確である。もし子音 C が、Spruit の仮定する規則に従って、その単位にアクセントが置かれるとき、この子音に後続してアクセントの置かれた schwa が現れる: Cə。例えば、a-3ə “the-water” D D' と a-3-k'á “the-water-PL” DDD' から分るように、語根部分 3 は強勢がある場合に 3ə となる。これは要素が R の場合にも当てはまることは、上に述べた例からも分る: á-3 “the flea” D' R, z-3ə / zə-3 “whose flea” RR' / R' R。

これ以外の無アクセント音節における schwa の出没については次の章で検討することにするが、このような schwa の振舞いを検討するためには Spruit の仮定する C(a) 単位を用いる方法が有利であろう。さらに Spruit の方法を用いる第二の理由は、Dybo の仮定する「結合価」の形態素そのものの定義が不十分であるためである。以下で検討するようにアブハズ語動詞の多くの接頭辞形態素は、都合がよいことに Spruit の仮定する C(a) 構造を成すものが多い。その点では Dybo と Spruit の議論には大きな齟齬が生じる

ことはないのであるが、Dyboによって「語根 *корень*」と見なされているものの中に、これが「preverb + 語根」と見なさなくてはならない例があるからである。例えば、Dybo (1998: 155) は自動詞の class B (“Subject + Indirect Object + root” より成るクラス) に属する語根が (+) 結合価をもつ例として、*a-xʰ3a-rá* “to overtake” (+ + +) の現在形 *s-a-xʰ3:wó:jtʰ* (I-it-overtake-DYN-Fit) “I overtake it” (- + + +) を挙げている。しかしこの動詞の語根を *xʰ3a* と見なすべき根拠はない (Dybo はそれを語根と見なす根拠を記してはいない)。何故ならば、アブハズ語話者のインフォーマントによれば、この動詞のアオリスト否定形は、*sə-b-xʰ3-m-3a-jtʰ* (I-you-PREV-NEG-overtake-(AOR)-Fin) のように否定マーカ *m* によって *xʰ3a* が分割されるからである。アブハズ語のこのようなアオリスト否定形における否定マーカによる分割は、他の多くの動詞形から判断すれば、preverb *xʰ* と語根 *3a* から成るものと見なされるからである。従って、*a-xʰ3a-rá* は *a-xʰ-3a-rá* と見なさなくてはならず、Dybo のこれを class B に属するとする分析は誤りであろう。これを Spruit の方式によってアクセントクラスを標記すれば、DDDD' となろう。

2. アブハズ語の schwa について

2. 1. 前の章で述べたようにアブハズ語の無アクセント下の schwa に関しては様々な議論がなされてきた。またアブハズ語を記述する際に最も困難な問題もまたこの schwa の取扱いである。アブハズ語の schwa は名詞の派生形だけでなく、動詞形においてより一層複雑な形で観察される。というのもアブハズ語のような所謂「複統合的言語 polysynthesis languages」は、動詞複合体 verbal complex を中心に文を構成するのであるが、この動詞複合体に挿入される代名詞的な人称接頭辞や文法範疇を表す様々な接辞 (主に接頭辞) の変化に伴って schwa の出没が観察されるからである。ここでは、schwa をアクセントとの関係から以下のように分けて考察してみるが、その前にアクセントとは無関係な schwa の特徴を述べてみたい。アブハズ語の schwa は母音 *a* と隣接して現れることはない。次の例を参照：*də-s-kʰ-wá-jtʰ* “I catch her /him” vs. *d-a-kʰ-wá-jtʰ* “it catches her /him”。また schwa は語頭に現れることはないが、動詞の column 1 (自動詞の主語 S と他動詞の直接目的語 O) の人称接頭辞 *jə-* “it, they; them” と照応する指示対象が動詞の直前にあり、この人称接頭辞にアクセントがある場合だけ、*ə-* として現れる。さらに schwa は半母音 *j, w* と融合して、*ə + j > [i:]*, *j + ə > [ji]*, *ə + w > [u:]*, *w + ə > [wə]* が音声的に実現される³⁾。

2. 2. アクセントの置かれる schwa

上で述べたように、子音 C に Spruit の仮定する規則に従って、その単位にアクセントが置かれるとき、この子音に後続してアクセントの置かれる schwa が現れる：*Cə*。例

えば, á-s-ra “to hit” のアオリスト形 s-bá-sə-jt’ (I (C1)-you.f. (C2)-hit-(AOR)-Fin.) “I hit you” は, column 2 (C2) にアクセントが置かれ⁴⁾, この本来の人称接頭辞 b の後ろに schwa が現れている (cf. アオリスト否定形は強勢が否定マーカーに落ち, b の後ろに schwa は現れない: sə-b-mó-sə-jt’ (I (C1)-you (C2)-NEG-hit-(AOR)-Fin.) “I did not hit you”).

さらにアクセントの置かれた Cá の母音 a が弱化した結果として, Că となる場合がある. Aršba によれば, これは語尾音 auslaut とさらにより広く語中音 inlaut に見られるという (Аршба: 1992: 236-237). a-č’ác < *a-č’ác “new” (cf. a-č’á “young”), a-xá < *a-xá “head” (cf. Abaza xʔa).

2. 3. アクセントの置かれない schwa

アクセントの置かれない schwa が現れる条件を完全に述べることはできないが, それでも schwa の出現を予測することはできる. なおこの予測とは無関係なものとしては, 語中音の位置にある非アクセント下の a の弱化によって生じた schwa がある. 例えば, Aršba からの例: á-pxən < *á-pxan “summer” (cf. apxá “warm”), á-ʒəs < *á-ʒas “kid, young goat” (cf. á-ʒara-kʷa “kids”) (Аршба: 1992: 237). これ以外に私の調査した次の語も恐らく同類の弱化によって生じた schwa であろう: á-žʷc’əs “swallow” (cf. á-žʷc’ára “swallow”), á-šxác “honey bee” (cf. a-šxás “a honey bee”). 以下に述べる場合にもこのような a > ə の弱化を含んでいる可能性があるが, Aršba がこれに関して「極めて稀である」と述べているように, 多くの場合アブハズ語とアバザ語においては schwa の出現に一致が見られる. 以下の例を参照: Abkh. áapən : Abaz. ʃapnə “spring”, Abkh. á-dg’əl : Abaz. adg’əl “the earth”, Abkh. á-dəd : Abaz. dədra, ddra “thunder”, Abkh. á-x’əʒ, cf. á-x’ʒ : Abaz. x’əz “name”, Abkh. á-č’k’wən : Abaz. c’k’wən “boy”, Abkh. á-bəz : Abaz. bəz “tongue”, Abkh. a-bəl-rá : Abaz. bəlra “to burn”, Abkh. a-q’ərq’ə : Abaz. q’ərq’ə “throat”. このことは a > ə の弱化を証言することのできる資料がほとんどないことを示しているようである.

アクセントの置かれない schwa について, アクセント前とアクセント後ろの位置に現れる場合に分けて考察してみる⁵⁾.

2. 4. アクセントの後ろに現れる schwa

任意の子音を C, 母音を V, 語あるいは派生の境界を # で標記すれば, 次の場合が考えられる. 1) -V C₁C₂ə# : C₂ = jʷ, 2) -VC₁əC₂#, 3) -aC₁C₂#, 4) -VC₁C₂əC₃#, 5) -(V)C₁əC₂C₃#, 6) -VC₁əC₂C₃ V(#/-), 7) -VC₁C₂əC₃V-, 8) -VC₁əC₂C₃C₄V-, 9) -VC₁C₂əC₃C₄V-.

1) -V C₁C₂ə# : C₂ = jʷ

職業を表す接尾辞 -j^w [ɥ] が語末の位置にあり、その前に子音があるとき、schwa がこの接尾辞の後ろに現れる傾向がある：a-xəs-j^wə “shot”, a-sáx'atəx-j^wə “painter”, a-təž'-j^wə “publisher”, á-psax-j^wə “betrayed”, á-3ax-j^wə (or a-3ax-j^wə) “tailor”, á-mj^was-j^wə “passer-by”, á-təj-j^wə “seller”.

もしこの接尾辞の前に開母音 a がある場合には schwa が現れにくい：á-c^way^wa-j^w “peasant”, á-š^warəca-j^w(ə) “hunter”, á-š^wah^wa-j^w “singer”, á-3sa-j^w(ə) “swimmer”, aáx^wa-j^w “buyer”. しかし schwa が現れる例もある：á-čəwa-j^wə “horseman”, á-rwa-j^wə “soldier”, a-nəq^wca-j^wə “driver”.

以下、Kuipers (1960: 41) に倣って、子音を音声的な「きこえ sonority」の観点より低から高への順に3つの系列に分けることにする⁹⁾：

I 系列 = stops, affricates, fricatives

II 系列 = n, m, r, l (resonants)

III 系列 = j, w (semivowels)

2) -VC₁əC₂ # :

語末に終る子音を含めて2子音間に schwa が現れる場合は、以下の組み合わせがある。

- a) C₁ = I 系列, C₂ = I 系列の例：áaxəs “from”, á-x'ə3 (cf. Abaz. x'ə3) “name”, á-lax^wəc “eyelash”, á-š'əž “morning”, á-bəz (cf. Abaz. bəz) “tongue”, a-bəbəš “pure white”, á-c'əx “night”, jə-l-mə-sə-z “the one who hit her and”, á-dəd (Abaz. dədra, ddra) “thunder”, s-bə-sə-p “I'll hit you”,
- b) C₁ = I 系列, C₂ = II 系列の例：áapən (cf. Abaz. ʔapnə) “spring”, ájatəm “orphan”, á-3ən (cf. Abaz. ɣnə) “winter”, də-k^wə-m “(s)he is not on”, jə-k^wə-n “it was on”, bə-s-mə-sə-n “don't hit me”.
- c) C₁ = I 系列, C₂ = III 系列の例：ámáčəj^w “few (of people)”.

これを纏めると、C₁-C₂ の系列がそれぞれ I-I, I-II, I-III のときこの子音間に schwa が現れる。これは「きこえ sonority」が同じ子音間、あるいは「きこえ」が低い子音とより高い子音間に schwa が現れやすいことを示している（例外は、á-laməs “conscience”）。ここでさらに a) の I-I 系列の場合を観察すれば、C₁ が閉鎖音のとき C₂ は摩擦音の組み合わせか (á-bəz, a-bəbəš), あるいは C₁ が無声摩擦音のとき C₂ は有声摩擦音・破擦音の組み合わせである (á-š'əž, á-x'ə3, jə-l-mə-sə-z)。これもまた音声的な「きこえ」が閉鎖音・無声摩擦音から有声閉鎖音、さらに有声摩擦音の順に高くなることに関連しているようである。即ち、この場合も「きこえ」が低い子音とそれよりも高い子音の間に schwa が現れている。

3) -aC₁C₂#:

これに対して、語末に終る子音を含めて2子音間に schwa が現れない場合は、以下の組み合わせがある:

a) C₁ = II 系列, C₂ = I 系列の例: á-mc “lie”, á-mc’ “fly”, á-mš “day”, ans “so”, ant “those”, a-nóh^wamš “holiday”,

b) C₁ = I 系列 (fricative-labialized), C₂ = I 系列(stop)の例: á-š^wt “flower”, á-ž^wt^w “drink”.

C₁-C₂の系列がそれぞれ II-I, I (fricative-labialized)-I (stop) のときこの子音間に schwa は現れない. 音学的に無声の fricative は stop に比較して「きこえ」の観点からいえば高いとされるので、「きこえ」が高い子音と「きこえ」がより低い子音の間には schwa が現れないことを示しており、これは上の schwa が現れる場合とは「きこえ」に関して逆の順序になっている.

なお、-C₁C₂V は後に述べる「Kuipers の規則」により、C₂の直前に schwa は現れない. これに関しては註6) の Spruit の発言と比較されたい.

4) -VC₁C₂əC₃#:

語末に終る子音を含めて3子音があり、C₂とC₃の間に schwa が現れるとき、C₁, C₂, C₃の系列は以下である:

a) C₁ = I 系列, C₂ = I 系列, C₃ = II 系列の例: á-č^w-k^wən (cf. Abaz. c^w-k^wən “boy”, á-dgəl (cf. Abaz. adgəl) “earth”, a-psád-gəl “homeland”,

b) C₁ = II 系列, C₂ = I 系列, C₃ = II 系列の例: á-mp^wəl “ball”,

c) C₁ = I 系列, C₂ = I 系列, C₃ = I 系列の例: á-š^wtəc “single flower”, á-labžəš “tear”, á-šk^wəs (Genko: 1998) “year”,

d) C₁ = II 系列, C₂ = I 系列, C₃ = I 系列の例: á-ntəc’ “outside”, ár-pəs “youth”,

e) C₁ = I 系列, C₂ = II 系列, C₃ = II 系列の例: s-bós-s-rə-m “I will not hit you”.

a)の例からわかるように「きこえ」は、C₁とC₂で低く、C₂からC₃に至って高まる. このC₂とC₃の間に音節核としての schwa が発達し、C₃に至って音節を閉じている. この「きこえ」の最小値であるC₁とC₂の間には音節の切れ目がある: áč^w-k^wən, á-dgəl, ap-sád-gəl. b), c), d), e)も同様に音節の切れ目がC₁とC₂の間にあり、C₂とC₃の間に音節核としての schwa が発達している: ám-p^wəl, áš^w-təc, á-lab-žəš, án-təc’, ár-pəs, a-bós-rəm.

さらに -VCCCC# の例を参照: á-k^wəmp^wəl “round”, á-pšč^wəč^w “popcorn”. これらは4子音をC₁C₂C₃C₄とすれば、それぞれの系列はI-II-I-II, I-I-I-Iとなる. ここで前者の音節は、á-k^wəmp^wəlとなり、このC₁とC₂の間にも schwa が現れている⁸⁾. 後者はápš-

ǝ'ǝ' となり、第2音節に音節核の schwa が現れている (pš については註7)を参照)。

なお、上でも触れたように á-pxən < *á-pxan “summer” (cf. apxá “warm”), á-ž'w'c'əs (cf. Abkh. á-ž'w'c'ára “swallow”, Abaz. ž'w'c'ə) “swallow” も同じ構造を成しているが、*á-ž'w'c'as の a の弱化によって生じた形である。この場合にも母音 a は完全にゼロとはならず、音節核としての schwa を維持している。

5) -(V)C₁əC₂C₃#:

語末に終る子音を含めて3子音があり、C₁とC₂の間に schwa が現れるとき、C₁, C₂, C₃の系列は以下ようになる:

- a) C₁ = I 系列, C₂ = II 系列, C₃ = I 系列の例: á-žəməš' “eyebrow”, á-č'wəmc' “gadfly”, á-layəɾɜ (Abaz. laɜə) “tear”,
 b) C₁ = I 系列, C₂ = III 系列, C₃ = I 系列の例: d-lə-sə-jt' “(s)he hit her”, jə-k'wə-wp' “it /they is/are on”.

C₁-C₂-C₃の系列はそれぞれ I-II-I, I-III-I になり、schwa は I-II の間と I-III の間に現れている。これらから分るようにアブハズ語では、子音に後続する共鳴音 resonant や半母音が摩擦音、破擦音、閉鎖音で閉じられているときには、共鳴音や半母音の前に schwa が現れる: (V)CəRC# (R = resonant or semivowel).

一般に任意の3子音が連続する場合には、アブハズ語で広範にみられる以下のような「3子音の規則」が働く: CCC# or CCCV > CəCC# or CəCCV. 即ち、語末あるいは母音前の子音から左側に向かって数えて第3番目と第2番目の間に schwa が現れる。a-CCəCC# の例は少ないが以下の例が見つかる: á-š'təbž' “sound”, á-mčəbž' “week”.

また Ca の直前には schwa は現れない。これは Kuipers がカバルダ語の schwa に関して述べていることであるが、アブハズ語にも当てはまる。彼の次の発言はその事情を説明している: “A consonant followed by a constitutes the rising part of a syllable, and therefore does not itself give rise to another syllabic peak, cf. fɜəm versus k'wəʒma.” Kuipers (1960: 40-41). Kuipers は述べていないが、さらに Cə の直前には非アクセントの schwa は現れない。この敷衍した規則を以後、「Kuipers の規則」と呼ぶことにする。

6) -VC₁əC₂C₃ V:

3子音の前後に母音がある場合には、C₁, C₂, C₃の系列は以下ようになる:

- a) C₁ = I 系列, C₂ = II 系列, C₃ = II 系列の例: áapənra “spring”, á-žənra “winter season”,
 b) C₁ = I 系列, C₂ = II 系列, C₃ = I 系列の例: á-fərh'w'a “quickly”, á-žaxəɾta “sewing place”, á-š'wəɾj'w'a “smoked cheese”, d-tə-zə-m-ga-jt' “I did not take her /him out”,

- c) $C_1 = I$ 系列, $C_2 = I$ 系列, $C_3 = II$ 系列の例: á-lak'əs-ra “to touch”,
 d) $C_1 = II$ 系列, $C_2 = I$ 系列, $C_3 = I$ 系列の例: á-nəpsa “stepmother”, aá-məs'tax' “after”,
 á-laməsda “conscienceless”,
 e) $C_1 = II$ 系列, $C_2 = II$ 系列, $C_3 = I$ 系列の例: jǫ-lə-m-təj “(that) which she did not sell”,
 l-čǫ-lə-m-šə-jt' “she did not kill herself”.
 f) $C_1 = I$ 系列, $C_2 = I$ 系列, $C_3 = I$ 系列の例: á-h^wəzba “knife”.

この中で a), b) の場合には, I-II の系列の間に schwa が現れている. c), d) の場合は, 上で検討した「きこえ」の観点からいえば例外を成しているように見える (cf. á-mc). しかし Kuipers の規則によって, 末尾の a に先行する子音 C_3 はこの母音とともに音節を形成するのであるから, この子音の前に音節核となる schwa を置くことはない. 3 子音の規則によって C_1 と C_2 の間に schwa が現れ, これらの子音は 1 つの音節を形成する. 従って, C_2 と C_3 の間に音節の切れ目ができる: á-nəp-sa, (cf. á-x'ə3). f) も同様の規則によって, 同系列の間に schwa が現れる. e) は C_1 の子音 l が I 系列のように振舞っているようである.

7) -VC₁C₂əC₃V-:

3 子音の前後に母音がある場合で, schwa が C_2 と C_3 にあるのは以下である:

- a) $C_1 = II$ 系列, $C_2 = I$ 系列, $C_3 = I$ 系列の例: jǫ-m-j^wə-ša “(the one) who may not run”
 b) $C_1 = II$ 系列, $C_2 = I$ 系列, $C_3 = II$ 系列の例: á-rd^wəna “thrush”

これらはいずれも 3 子音の規則に合わず, かつ Kuipers の規則にも合わず, C_2 - C_3 (I-I, I-II) の間に schwa が現れる. a) は動詞複合形であり, 以下で述べる Trigo の規則に従って, 語根の後ろに境界があると見なされるので, jǫ-m-j^w#- となる. 語根の境界より左に向って子音を数えるので, この語根後置要素 š を含めた 3 子音の規則は働かない. 語根の後ろに現れている schwa は j^w の唇音化された場合に現れる schwa であろう (cf. a-xəs-j^wə “shot”). b) のように II-I-II-a は Kuipers の規則の例外かも知れない (cf. a-fəj^w-rá, a-bəl-rá).

8) -VC₁əC₂C₃C₄V-:

4 子音の連続において C_1 と C_2 の間に schwa が現れる例は少ないが以下のようなものである:

- a) $C_1 = I$ 系列, $C_2 = II$ 系列, $C_3 = I$ 系列, $C_4 = I$ 系列の例: á-3axərsta “seam”,
 b) $C_1 = I$ 系列, $C_2 = II$ 系列, $C_3 = I$ 系列, $C_4 = II$ 系列の例: á-3ərj^w-ra “to listen”,
 c) $C_1 = II$ 系列, $C_2 = II$ 系列, $C_3 = I$ 系列, $C_4 = I$ 系列の例: jǫ-lə-m-j^w-ša “(that) which she may not write”,

いずれも Kuipers の規則によって C_2 の前に schwa は現れない. 4 子音の連続におい

て、共鳴音 resonant (R) が C_2 の位置にある場合には、3子音の規則は働かず、この子音の前にのみ schwa が発達する：- C_3RCCV 。a), b) では I - II 系列の間に schwa が現れる。c) のような動詞形は、以下に述べるように語根 j^w の後ろに境界があると見なすことができるので、- $C_3CC\#-CV$ の構造と考えることができる (# は境界を表す)。アクセントについては上述の 6)-e) 参照。以下の例を参照：

d) $C_1 = I$ 系列, $C_2 = II$ 系列, $C_3 = I$ 系列の例： $j-tá-zə-m-š' \#-wa-z$ “(the one) who was not immersing it /them”,

e) $C_1 = II$ 系列, $C_2 = II$ 系列, $C_3 = I$ 系列の例： $j-š-lə-m-x\#-wa$ “(that) which she does not sharpen”.

9) - $VC_1C_2əC_3C_4V-$:

4子音の連続において C_2 と C_3 の間に schwa が現れる例は少ないが以下である：

a) $C_1 = II$ 系列, $C_2 = I$ 系列, $C_3 = I$ 系列, $C_4 = I$ 系列の例： $á-rpəzba$ “young man”.

Kuipers の規則により C_3-C_4 間に schwa は現れない。さらに C_1-C_2 (II-I) 間にも schwa は現れず、3子音の規則により C_2 と C_3 の間に schwa が現れる。

2. 5. アクセントの前に現れる schwa

アクセントの前に schwa が現れる子音の結合は、以下の場合がある：

1) - $C_1əC_2C_3V-$, 2) - $C_1əC_2C_3C_4V-$, 3) - $C_1əC_2C_3\#-C_4V-$, 4) - $C_1C_2əC_3C_4V-$.

1) - $C_1əC_2C_3V-$:

a) $C_1 = I$ 系列, $C_2 = II$ 系列, $C_3 = I$ 系列の例： $a-q'ərq'ə$ (cf. Abaz. $q'ərq'ə$) “throat”, $a-xərc'wə$ “lactic acid”, $Xəmž'áz'w$ “person’s name”, $a-fərtən$ “storm”, $zənʒá$ “quite”, $a-k'wəmž'wə$ “Circassian coat”, $a-ʒəršə$ “boiling water”, $a-c'w'k'w(ə)rpá$ “wave”, $a-h'wənc'wá$ “mud”, $a-tənxa-rá$ “to remain after”, $b-sə-m-š'ə-jt'$ “I did not kill you”, $də-l-ž'á-jt'$ “she deceived her /him”, $də-l-k'wəbá-jt'$ “she washed her /him”,

b) $C_1 = I$ 系列, $C_2 = II$ 系列, $C_3 = II$ 系列の例： $a-k'ərmət'$ “brick”, $a-bəl-rá$ “to burn”, $až'ərnəh'wə$ “January”,

c) $C_1 = I$ 系列, $C_2 = I$ 系列, $C_3 = I / II$ 系列の例： $a-xədc'á$ “duty”, $c'wəbbən$ “September”, $a-c'wək'wəbár$ “drop”, $a-x'wət-x'wət-ra$ “to whisper”, $a-c'wəpxaš'á-ra$ “to be ashamed of”, $sə-s'w-ž'á$ “deceive mé”, $bə-z-bá-jt'$ “I saw you”, $bə-z-gá-jt'$ “I took you”, $də-s-q'až'á-jt'$ “I calmed her /him”, $bə-z-də-rə-jt'$ “I knew you”, $bə-z-dór-wa-jt'$ “I know you”; $a-fəj'w-rá$ “to smell”.

上の例の全ては、Kuipers の規則により C_2 と C_3 の間に schwa が現れない。a) と b) は I - II 系列の間に schwa が現れる。c) のように I-I-I のとき3子音の規則により C_1 と C_2 の間に schwa が現れる (cf. $á-lak'əs-ra$ “to touch”).

2) -C₁əC₂C₃C₄V-:

a) C₁ = I 系列, C₂ = II 系列, C₃ = I 系列, C₄ = I / II 系列の例: a-h^wəntkár “king”, a-h^wəntkárra “kingdom”, Tərk^wt^wóla “Turkey”, a-fərp^whóš “heroin”, a-xərbgála-ra “to destroy”, jə-x-sə-rbgala-wá-jt’ “I destroy it / them”, Kərtt^wóla “Georgia”, b-sə-m-fj^wó-n “don’t smell me!”, bə-m-pšó-n “don’t look!” (-pš- は 1 子音として取扱われる可能性がある⁷⁾, cf. á-pšza “beautiful”); a-xənh^w-rá “to return”

b) C₁ = I 系列, C₂ = I 系列, C₃ = I 系列, C₄ = II 系列の例: də-b-s-mə-rdərə-jt’ “I did not introduce her /him to you”.

a) のような I-II-I の場合は I-II の間に schwa が現れる (I-II-II 系列の例: a-xənh^w-rá は Kuipers の規則により C₃-C₄ 間に schwa が現れず, C₁-C₂ (I-II) の間に schwa が現れる). b) は, Kuipers の規則により C₃ と C₄ の間に schwa が現れない. さらに C₁ と C₂ は有声閉鎖音, C₃ は無声摩擦音である. 「きこえ」は前者が高いのであるから, これは II-II-I の場合に schwa が II-II の間に現れることと類似して (cf. já-lə-m-təj), C₁ と C₂ の間に schwa が現れると考えられる.

さらに j-ta-sə-r-c^w-wá-jt’ “I make it empty” のような動詞活用形においては, 語根 c^w から子音を数えるべきであるという説が Loren Trigo (1992: 200-201) によって出されている. 後で触れるように動詞複合形では, 語根に直接後続する接尾辞部分の子音を含めると, 3 子音の規則が働かないことがしばしば生ずる. Trigo のこの説は, 恐らくアブハズ語話者が動詞語根の境界を認識し, そこから逆順して接頭辞の機能を確認するという境界画定と関連する重要な規則であるように思える. これを「Trigo の規則」と呼ぶことにしよう. 本論ではこのような動詞形を動詞語根の後ろに境界の記号 # をつけることにする. 従って, j-ta-sə-r-c^w-wá-jt’ > j-ta-sə-r-c^w#-wá-jt’ となり, -CəRC#- の構造となる (5-a) を参照). このような構造を以下のような 3) として分類できる.

3) -C₁əC₂C₃#-C₄V-:

a) C₁ = I 系列, C₂ = I 系列, C₃ = I 系列, C₄ = III / I 系列の例: sə-b-š^w#-wá-jt’ “you kill me”, də-s-š^w#-rəm “I will not kill her/him”, də-s-š^w#-x’á-jt’ “I have killed her/him” (cf. a-š^w-rá “to kill”, bə-s-šó-jt’ “I killed you”), də-s-k’#-wá-jt’ “I catch her /him” (cf. də-s-k’ó-jt’ “I caught her /him”);

b) C₁ = III 系列, C₂ = I 系列, C₃ = I 系列, C₄ = III 系列の例: jə-z-ž^w#-wá-jt’ “I dig it / them” (cf. jə-z-žó-jt’ “I dug it / them”), jə-z-ž^w#-wá-jt’ “I drink it /them” (cf. jə-z-žó-jt’ “I drank it / them”), jə-z-ž #-wá-jt’ “I roast it /them” (cf. jə-z-žó-jt’ “I roasted it /them”), jə-s-s^w#-wá-jt’ “I weave it /them” (cf. jə-s-só-jt’ “I wove it /them”), jə-s-x^w#-wá-jt’ “I sharpen it /them” (cf. jə-s-xó-jt’ “I sharpened it /them”), jə-s-š^w#-wá-jt’ “I dye it /them” (cf. jə-s-šó-jt’ “I dyed

it /them”), jə-z-ʒ #-wá-jt’ “I roast it /them” (cf. jə-z-ʒə-jt’ “I roasted it /them”).

これらはいずれも動詞の変化形であり，Trigo の規則が働いている場合である．それぞれには，3子音の規則が働く．

4) -C₁C₂əC₃C₄V- :

a) C₁ = I 系列，C₂ = I 系列，C₃ = II 系列，C₄ = I 系列の例：b-sə-m-bá-jt’ “I did not see you”，b-sə-m-gá-jt’ “I did not take you”，d-sə-m-q’ažá-jt’ “I did not calm her /him”，də-b-sə-rđr#-wa-jt’ “I introduce her /him to you”，d-sə-m-š’ə-jt’ “I did not kill her/ him”．

b) C₁ = I 系列，C₂ = I 系列，C₃ = I 系列，C₄ = I 系列の例：b-sə-ʒ’wá#-wá-jt’ “I wash you”，d-sə-č’h’á-jt’ “I endure her /him”，

c) C₁ = II 系列，C₂ = I 系列，C₃ = II 系列，C₄ = I 系列の例：jə-l-sə-rbá-jt’ “I showed it /them to her”，

d) C₁ = I 系列，C₂ = II 系列，C₃ = II 系列，C₄ = I 系列の例：d-lə-m-k’wábá-jt’ “she did not wash her /him”，

e) C₁ = I 系列，C₂ = II 系列，C₃ = I 系列，C₄ = I 系列の例：də-b-mə-č’há-n “don’t endure her /him!”，

これらは全て動詞の変化形であり，その語根のC₄に母音が後続しているために，Kuipers の規則が働く．Trigo の規則は働かず，a), c) はC₂-C₃ (I-II 系列) の間に schwa が現れる．b) のように系列が全て同じ I 系列のときは，3子音の規則が働きC₂-C₃ 間に schwa が現れる．d) の場合にはC₁-C₂ (I-II 系列) の間ではなく，C₂-C₃ (II-II 系列) の間に schwa が現れている．これは -CRəR# の s-bá-s-rə-m “I’ll not hit you” と類似の構造と見なされる．e) は I-II の間ではなく，3子音の規則を優先して schwa が現れている．これは上の b-sə-m-fj’ə-n “don’t smell me!” とは異なるもので，例外を成している．

2. 6. アブハズ語の schwa の現れ方

上で検討したところを纏めると，以下のような環境のもとで非アクセントの schwa の出没を予測することができる．

- 1) アブハズ語の schwa は，子音 C がアクセント (Spruit の仮定する強勢 stress) を持つならば，その子音 C の直後にアクセントの置かれる schwa が現れる：Cə．
- 2) Ca あるいは Cə の子音直前には，非アクセントの schwa は現れない (Kuipers の規則)：CCa, CCə．
- 3) I 系列 (閉鎖子音，摩擦子音，破擦子音) と II 系列 (共鳴音 m, n, r, l) がこの順序で隣合い，後者の子音の後ろに母音 a あるいは ə がなければ，I と II 系列の間に schwa が現れる (同じ関係は I と III 系列 (j, w) にも当てはまる)：TəR#, TəRCa (T =

- I 系列, R = II, III 系列, C = 任意の子音). I 系列と I 系列の子音が隣接する場合には, しばしば I (stop) - I (fricative), あるいは I (voiceless fricative) - I (voiced fricative / affricate) の順序のときに schwa がこれらの子音の間に現れる: TsəTf# (Ts = stop, Tf = fricative), Tf.vl.əTf.v. (Tf.vl. = voiceless fricative, Tf.v. = voiced fricative / affricate).
- 4) 語末に終る子音を含めて 2 子音が II 系列と I 系列の順序にあるならば, この間には schwa が現れない: aRT#. また同様な条件で I (fricative) - I (stop) の順序に 2 子音が隣接するならば, schwa は現れない: aTf Ts#.
- 5) C₁C₂C₃V の 3 連続の子音があるならば, Kuipers の規則によって C₂ - C₃ の間に schwa は現れず, C₁ - C₂ の間に schwa が現れる (3 子音の規則): C₁əC₂C₃V.
- 6) C₁C₂C₃# の 3 連続の子音があるならば, 上記の 3) と 4) によって schwa の現れ方が 2 通り可能である.
- a) C₁C₂əC₃# : C₂ - C₃ の系列が I - II, あるいは I - I 系列のとき: CTəR#, CTsəTf#.
- b) C₁əC₂C₃# : C₁ - C₂ の系列が I - II, あるいは I - III 系列のとき: TəRC#.
- 7) C₁C₂C₃C₄V の 4 連続の子音があるならば, Kuipers の規則によって C₃ - C₄ の間に schwa は現れず, 上記の 3) と 4) によって schwa の現れ方が 2 通り可能である.
- a) C₁əC₂C₃C₄V : C₁ - C₂ - C₃ の系列が I - II - I (あるいは II - II - I, まれに I - I - I) のとき: TəRTCv (稀に TəTTCv).
- b) C₁C₂əC₃C₄V : C₁ - C₂ - C₃ の系列が I - I - II, II - I - I, I - I - I, II - I - II のとき: TTəRCv, RTsəTfCv, T Tf.vl.əTf.vCv, RTəRCv.
- 8) 動詞複合体は, 動詞語根部分の子音から左方向へ 3 子音の規則が働く (Trigo の規則): TəT-B#C-, (T)TəR-B#C-, RəT-B#C- (B = 語根子音).
- schwa の出現が上のような環境によってほぼ予測できるとするのであれば, アブハズ語の schwa を音素として認めるという立場は脆弱のものになるであろう. 本論はアブハズ語の音韻論を扱うものではないが, アクセントとの関わりでこの schwa の音韻的な諸問題に以後触れたいと思う. (この稿続く)

註

- 1) 本研究は, 平成 16-17 年度科学研究費補助金 (研究課題名「アブハズ語テキストの分析と基礎語彙集の作成」, 基盤研究 (C) 課題番号 16520236) の援助を受けた. ここで用いられているアブハズ語資料は主に, 2000-2004 年にわたりグルジア共和国で蒐集したアブジュイ Abzhywa 方言の調査ノートに拠っている. インフォーマントはアブジュイ方言話者 Ana Tsvinaria さんである. Ana Tsvinaria さんには様々な質問に対する忍耐のいる調査に協力くださり感謝の意を表したい.

- 2) Kuipers (1960: 104) は、カバルダ語が「無母音」であると言っているわけではない。彼はカバルダ語の音韻体系を次のように述べているのである：“The most striking characteristic of the Kabardian phonemic system is *the absence of an opposition consonant-vowel*. The segment has consonantal as well as vocalic features; it can appear in syllabic and non-syllabic positions. The segments are, in a manner of speaking, all semivowels.” (イタリック — 柳沢) この Kuipers に対する批判は, Szemerényi, O. (1967) *The New Look of Indo-European: Reconstruction and Typology. Phonetica* 17, 65-99; Halle, M. (1970) *Is Kabardian a Vowel-less Language ?*, *Foundations of Language* 6, 95-103; Kumakhov, M. A. (1973) *Теория моновокализма и западнокавказские языки. ВЯ.* 6. 54-67. を参照。さらに Kuipers の彼等に対する次の反論も参照されたい：“The whole discussion on the typological bearing of NWCaus. on the reconstruction of PIE has had one unusual aspect. Normally the typologist notes the results of description and bases his conclusions and speculations on those results. In our case, however, the typologists, starting with Jakobson, rejected the results of description. The reason for this rejection is the conviction that all languages must have vowel systems which minimally comprise an open and a close member. A description of a language which fails to yield this minimum is therefore considered incorrect. As a result, the typologist is tempted to make corrective statements about a complex language he has not studied in detail.” (1976: 102).
- 3) Chirikba (2003:18)に拠ればアブハズ語の音韻体系は次のようである：
 stops: labials. *b-p-p'* (voiced-voiceless-ejective), dentals. *d-t-t'*, *d^w-t^w-t'^w* (labialized),
 velars. *g-k-k'*, *g^wk^w-k'^w*, *g'-k'-k'^w* (palatalized), uvulars. *q'*, *q^w*, *q'^w*, pharyngal. (?);
 affricates: dentals. *ʒ-c-c'*, *ʒ^w-c^w-c'^w*, alveolars. *ʒ̣-č-č'*, *ʒ̣'-č'-č'^w* (palatalized);
 fricatives: dentolabial. *v-f*, dental. *z-s*, alveolars. *ž-š*, *ž^w-š^w*, *ž'-š'*, uvulars. *ɣ-x*, *ɣ^w-x^w*, *ɣ'-x'*,
 pharyngal. *h*, *h^w*;
 resonants: *m*, *n*, *r*, *l*; semivowels: *w*, *j*, *j^w*.
 vowels: low / open. *a*, high / close. *ə*.
 semivowel *j^w* は、「きこえ」の観点よりすれば, voiced pharyngal fricative と見なすことができる。これ故, 本論では I 系列に属する子音として取り扱う。
- 4) “column” の用語については, Hewitt (1989-b: 56) 参照。
- 5) アブハズ語の語 (語形) を引用する際には, 名詞は定冠詞と語根 (語基) の部分を分離して記す。動詞の *masdar* は, *masdar* 接尾辞 *-ra* と冠詞 *a-* を分離して記す。接辞を含む動詞複合形は, 各形態素を分離して記す。
- 6) Spruit (1985: 76-77) は, 無アクセント下の *schwa* の (しばしば任意である) 出現の「規則 rules」を明らかに出来るとして以下のような規則を挙げている。これは Spruit によれば厳密な規則ではなくて傾向であるという。Spruit の条件は本論のような子音の分類を行ってはいないために, また Kuipers の規則を用いないため, *schwa* の現れる条件を明確に予測し得ていない。それにも拘らず Spruit の説には, *schwa* が現れる条件を探し出すための興味深いヒントがあるように思われる。Spruit によれば *schwa* の出現は, 次のようである：
 1) resonant (母音に隣接していない) は, それに隣接して *ə* をもつ, あるいは音節として発音される: #RC = [RC] *mtak'* “a present”, CR# = [CəR / CR] *áʒən* [aʒən, aʒn] “the water”, CRC [CəRC] *abənh^wá* “the wild pig”. しかし CRR# [CRəR]. 2) 他の場所では, *ə* は 2 子音連続に現れない傾向がある: *acg^wá* “the cat”, *ázná* “full”, *ámta* “the present”, *ámlla* “the hun-

- ger”, ámarya “easy”. 3) 3子音連続のとき, ə がもし現れるならば, 第1子音と第2子音の間に見つかる: CəCC#/V: acəg^wk^wá “the cats”. しかし類似の連続でも ə は書かれない: apsc^wá “the corpses”. 4子音連続のとき, ə は第1子音と第2子音の間, あるいは第2子音と第3子音の間に現れるかもしれない: apəs^wtrák’ “(kind of) porridge”, áxbək’rá “to deviate”. 4) 語末は1子音として数える: ábəz “the tongue”. 語末が3子音のときは, CəCC# or CCəC# をもつ: dətáməzt’ “he was not in it” or yətámçəz “which had not been in it”. 5) 有声音は無声音よりはやく ə を生じさせる: d(ə)cáy’t’ “he went” vs. scayt’ “I went”. 特に有声音の fricatives は, その行動において resonants に近い: yətámçəz は RCR# と, yəsáçməz は CRR# と, dətáməzt’ は RRR# とパラレル.
- 7) cluster ps はこの2子音の間に schwa が挿入されることはない. 次の例を参照: a-psrá “death, to die”, á-pssa-ra “to sweep”, a-pst’wó “animal”, á-psta “valley”, a-psš’a-rá “to take a rest”, á-psš’wá “Abkhaz”. また pš, ps, pš^w も同様にこれらの2子音の間に schwa を挿入することがないようである: á-pšza “beautiful”, á-pš-rá “to look”, a-pšt’wó “color”; pšbá “4”, á-pš’ga-ra “to introduce”; á-pš’ma “master”. さらに, Trigo (1992: 202) は consonant clusters について, schwa によって分離されるクラスター (ps^w, cg^w, bc) と, 単一の子音として扱われるクラスター (ps, by, th^w) に言及している. Trigo の説は恐らく正しいであろう. 次の例を参照: á-psth’wá “cloud”. これは schwa の出現の観点からは, áCCa と見なしうるであろう. Kuipers の規則から CC の間に schwa は現れない.
- 8) Генко (1998) 参照.

参考文献

- Allen, W. S. “On One-Vowel Systems”. *Lingua*. 13, no. 2, p.111-124, 1965.
- Chirikba, V. A. *Abkhaz*. Languages of the World / Materials 119, Lincom Europa, 2003.
- Hewitt, B. G. *Abkhaz*. Routledge. 1989-a.
- “Abkhaz”. — In: (ed.) G. Hewitt. *The Indigenous Languages of the Caucasus*. Volume 2. New York. 1989-b.
- Kuipers, A. H. *Phoneme and Morpheme in Kabardian*. Mouton. 1960.
- “Typologically Salient Features of Some North-West Caucasic Languages”. *Studia Caucasicca*, 3, 1976.
- Spruit, A. “Stress in Abkhaz”. *Studia Caucasicca*, 6, 1985. pp. 31-81.
- Trigo, L. “Abkhaz Stress Shift”. In: (ed.) Hewitt, G. *Caucasian Perspectives*. Lincom Europa. 1992. pp. 191-235.
- Аршба, Н. Некоторые вопросы акцентологии абхазского языка. In: (ed.) Hewitt, G. *Caucasian Perspectives*. Lincom Europa. 1992. pp. 236-239.
- Генко А. Н. *Абхазско-русский словарь*. Сухум. 1998.
- Дыбо, В. А. *Славянская акцентология. Опыт реконструкции системы акцентных парадигм в праславянском*. Москва. 1981.
- Балто-славянская акцентная система с типологической точки зрения и проблема реконструкции индоевропейского акцента. — *Балто-славянские исследования*. 1997.

Москва. 1998.

—— *Морфологизованные парадигматические акцентные системы. Типология и генезис.* Том 1. Москва. 2000.

Тугова, В. Б. *Абазинско-русский словарь.* Москва. 1967.

Шьякрыл К. С., Концъариа В. Ҷ., Аҗсуа бызшәа ажәар. 1. Сухуми. 1986.

Шьякрыл К. С., Концъариа В. Ҷ., Ҷкадуа Л. П. *Аҗсуа бызшәа ажәар.* 2. Сухуми. 1987.

柳沢民雄 「アブハズ語動詞のアクセントについて -アブハズ語アクセントの『ドゥイボの法則』の検討-」『名古屋大学言語学論集』第16巻, 2000.

—— 『アブハズ語の動詞構造の研究』平成14-15年度科学研究費補助金, 基盤研究(C)(2)研究成果報告, 2004.